

阿武町診療所等複合施設
コンセプト（案）

240901

はじめに

このプロジェクトは、齋藤医院の閉院（令和6年12月末）および福賀診療所の閉所（令和11年3月末）に伴い、「阿武町に医療機関が無くなってしまう」ということを発端に始動しました。

ただ、「病気が治ったら健康ではなく、そもそも病気にならないように健康づくりをする」のが重要であるのと同じように、「病院がなくなったら作れば解決ではなく、そもそも地域の元気が守られるようなあり方にする」という発想が必要です。

ここでは、ますます進行する高齢化・人口減少を見据え、阿武町の保健・医療・福祉の分野をハード面・ソフト面ともに総合的・横断的に捉えたこれからの健康づくりのあり方を検討する必要があります。

喫緊の課題である医療施設（診療所）の整備をベースとしながら、阿武町民誰もが安心して元気で生き生きと暮らし続けられるために、新しい施設は「医療」、プラス「保健」、「福祉」が一体となった機能を持つ複合施設を整備します。

現在下記のような課題に直面しています。

1

町内無医化への懸念

訪問看護ステーションが令和4年3月で閉所、齋藤医院が令和6年12月で閉院、福賀診療所が令和11年3月で閉所する予定であり、町内の医療機関がなくなる恐れ。住民が地域に元気に住み続けるためには、身近で医療を受けられることが必要。

2

人口減少にともなう患者数減少、民間での運営困難

令和2年時点で人口3050人、全国よりも40年早いスピードで減少しているため今後はさらなる患者数の減少を予想。そのため、医療機関のニーズはあるものの新たな民間医療機関の新規開業・運営はますます困難な状況。

3

町外受診率の高さと高齢化が、受診困難者を生み出す可能性

町内に専門医がいなかったり、かかりつけ医が萩市内の病院の方も多く、阿武町の国保被保険者の77%、後期高齢者医療被保険者の63.1%は町外の医療機関で受診。公共交通機関の衰退に伴い、移動手段として自家用車がますます増えることが予想されるが、高齢化が50.3%と非常に高いため、この先運転ができなくなった場合受診困難者が増加。またかかりつけ医が町外であると、いざというときに対応が遅れる可能性を懸念。

4

さらなる「予防・健康増進」推進の重要性

元気で生き生きと暮らし続けられる健康寿命延伸の大切さは言うまでもないが、一方で、阿武町民の一人あたりの医療費は令和元年度と比較すると減少傾向にあるものの、国・県と比較すると依然として高い。長寿命化や高齢化、医療資源不足が進行するこれからの時代を見据えると、今後はますます疾病予防、重症化予防などの「予防・健康増進」の推進が重要。

5

早期の情報取得とタイムリーな支援・連携強化が必要

福祉・介護等の相談は本人に限らずその家族・親族によることも多いが、相談者の側に「まずどこに相談したら良いのか」「そもそも相談していいものか」という心理的ハードルがあり相談が遅れるケースも発生。また対応者の側も、ますます高齢化・多様化する町民のニーズにきめ細かく対応するためには、各関連組織の綿密・迅速な連携・支援が必要。

新たな拠点施設にもとめられる方向性

課題を解決するために、新たな拠点施設に求められる方向性を3つに整理します。

新たな医療機関の設置

継続して運営できる地域の診療所を新設する

- 町民がいつでも身近で医療を受けられ、病気があっても安心して地域に住み続けられるように、町内には新たな診療所が必要不可欠。
- まちのかかりつけ医が必要。理想は総合診療科、多くの需要が見込まれる内科を主として医師を確保。
- その他専門医の診療が可能となる体制も構築（整形外科、耳鼻科、もの忘れ外来等）し、県や山口大学医学部、その他の医療機関との広域連携により医師不在のリスクを無くす。
- オンライン診療の設備整備や送迎手段の確保。
- 健康診断を行う。

↑課題の1.2.3に対応

保健・医療・福祉の連携

地域全体をケアする、みんなの健康づくりの拠点となる

- 誰もが住み慣れた地域で自立し安心して生活し続けられるように、「予防・健康増進」を推進し、地域みんなの健康づくりの拠点となる。
- 予防接種、運動習慣・健康意識向上のための教室などの保健事業、運動や料理教室などの介護予防事業など、地域の健康づくりのきっかけを提供し、病気を減らして元気を増やす。
- 多目的なカフェやサロンなど町民が気軽に集まれる場所もしつらえ、みんなでいきいきと、つながりのある地域づくり。
- 障がいの有無・病気の有無に関わらず、誰一人取り残されず個が尊重される生活・健康づくり。

↑課題の4に対応

相談窓口の集約化

なにかあったときにまずは立ち寄りたくなる相談窓口となる

- 保健・医療・福祉に関して、どんなささいなことでも何か相談するならばここ！という場所となる。こどもから大人までの窓口。
- 高齢者・障がい者の窓口「総合相談センター」、介護保険サービスの窓口「居宅介護支援事業所」、地域福祉やボランティアの拠点「社会福祉協議会」、児童福祉・子育て支援の窓口「こども家庭センター」などの機能が集約され、迅速に抜け漏れなく関連機関と連携。
- 必要に応じて栄養士・理学療法士・フットケア指導士など各種専門家をつなげた相談やケア。
- あらゆるデータはここに蓄積され、小さな自治体ならではの顔が見えるきめ細かいケアを、町民ひとりひとりに切れ目なく提供。

↑課題の5に対応



これらの方向性を踏襲し、保健・医療・福祉分野の統括拠点としての「阿武町診療所等複合施設」の整備計画を検討していきます。

施設全体のコンセプト（案）を下記のように定めます。

<コンセプト>

あぶの保健室

ここは、まちのなかにある地域の保健室。

生徒の相談や癒しの場でもある学校の保健室のように、
さまざまな不安や悩みを気軽に相談できる場所です。

病気であってもなくても、
心やからだのどんなささいなことでも大丈夫。

こどもからお年寄りまでみんながつどい、
そのつながりはきっと地域も元気にしてしまいます。

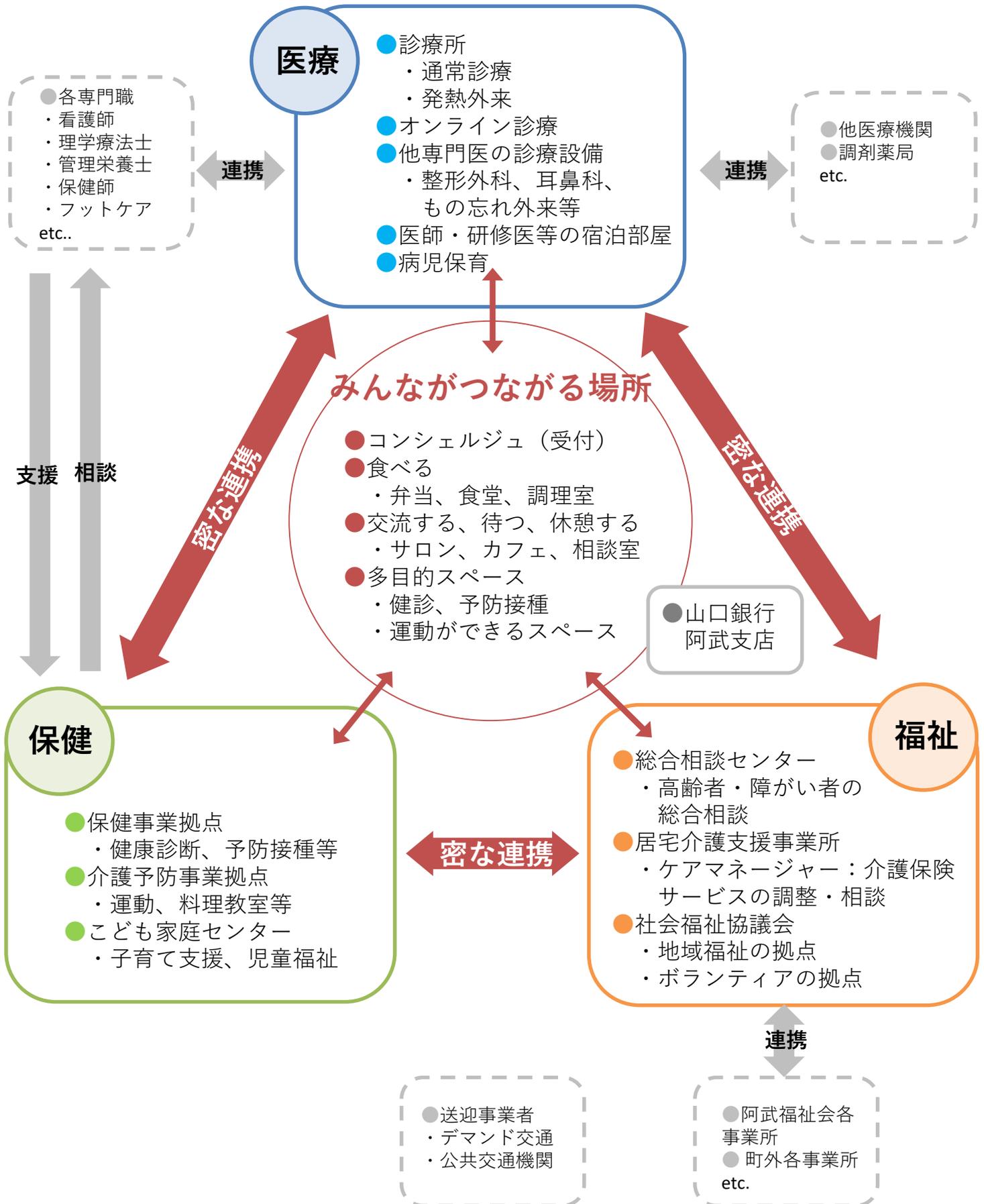
誰もがその人らしく、
安心して生き生きと暮らし続けられるまちをめざして。

ちいさなまちだからこそできる、
顔が見えるやさしい健康づくりの拠点となります。



阿武町診療所等複合施設内の必要機能（案）

複合施設となるメリットを最大限活かし、保健・医療・福祉分野の各組織が迅速に連携・強化されるように集約配置します。また、町内の健康づくりに関する各種データが一元的・統合的に蓄積され、それによりますますの健康増進が促進されていくことを目指します。さらに、必要に応じて各専門家・機関へ相談・紹介ができる体制も整えます。



阿武町の保健・医療・福祉分野におけるあるべき姿

国・県の関連計画と連動した阿武町の各計画に基づき、あるべき姿が定められています。

国

健康日本21計画（第三次） R6～R17

<ビジョン>

全ての国民が健やかで心豊かに生活できる持続可能な社会の実現

県

健康やまぐち21計画（第3次） R6～R17

<基本目標>

県民誰もが健やかで心豊かに暮らせる「健康やまぐち」の実現

町

第7次阿武町総合計画 R2～R11

<町の将来像>

夢と笑顔あふれる「豊かで住みよい文化の町」

<基本理念>

選ばれる町をつくる

ハッピーあぶ町
健康プラン
R2～R11

<基本理念>

『一日一笑、日々笑顔』
笑顔から生まれる健康づくり

阿武町
地域福祉計画
R6～R11

<基本的方向>

個が尊重される生活づくり

第3期
データヘルス計画
R6～R11

<目指したい姿>

阿武町民が生活習慣病を
重症化することなく、
元気にいきいきと
自立して暮らせる

阿武町
障害者プラン
R6～R11

<基本目標>

障害のある人が住み慣れた
地域で自立し安心して
生活できる社会の実現

阿武町高齢者
介護福祉計画（第九次）
R6～R8

<基本目標>

個が尊重され、住み慣れた
家庭や地域で、安心して
いきいきと暮らせる
社会づくり

阿武町子ども・子育て支
援事計画業
R2～R6

<基本目標>

みんなで子育て応援阿武町